

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)

大学院生研究

2014年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	現代心理学研究科	心理学専攻
研究代表者 (2015年3月現在 のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	現代心理学研究科・心理学専攻 D1年	相馬 正史	印
指導教員	所属・職名	氏名	
	現代心理学部・教授	都築 誉史	印
自然・人文・社会の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 社会	個人・共同の別	個人 <input type="checkbox"/> ・ <input checked="" type="checkbox"/> 共同 1名
研究課題	感情価と覚醒からなる感情状態が道德ジレンマ場面で道德判断に及ぼす影響		
研究組織 (2015年3月現在 のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	現代心理学研究科・心理学専攻 D1年 現代心理学研究科・心理学専攻 D2年	相馬正史 (研究代表) 千葉元気 (共同研究者)	
研究期間	2014 年度		
研究経費	(支出金額) 188,737円 /	(採択金額)	194,000円

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

道德ジレンマとは、1人を犠牲にして5人を救うことは道德的に適切かどうか、というように道德的な葛藤をもたらす状況を指す。近年の道德研究では、道德判断の二重過程理論を支持しており、義務論判断が自動・無意識反応に基づき、功利主義判断が熟考・認知コントロールに基づくと考えられている。本研究は、個人がどの程度、義務論を重要視しているか、功利主義を重要視しているかという道德判断の程度と、否定的感情の程度との関連について検討することを目的とした。功利主義判断を多くとる人は、道德判断に伴う認知的葛藤が小さいために、否定的感情が小さいこと、そして義務論判断を多くとるほど、心理的葛藤が大きいため、否定的感情が大きいと予測し研究を行った。また、道德判断にネガティブ感情の関連を検討するために、ポジティブ感情が義務論判断を減少させネガティブ感情が義務論判断を増加させると仮定し、感情操作を用い研究を行った。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[道德ジレンマ] [二重過程理論] [感情]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

多くの道徳心理学研究において、道徳ジレンマ場面での判断は、道徳判断の二重過程理論を通し説明される (Greene et al., 2001, 2008)。この理論では、(a) 義務論判断は直観反応に基づき (システム 1)、功利主義判断は熟考 (システム 2) に基づき、(b) 直観が熟考よりも先行すると仮定する。功利主義判断は、道徳的直観とそれに反する思考との心理的葛藤を克服する必要があるため、義務論判断は功利主義を先行すると考えられている (Greene, Nystrom, Engell, Darley, & Cohen, 2004)。これまでの研究で、ポジティブ感情の喚起 (Valdesolo & DeSteno, 2006) や、生理ストレス反応の低さが (Starcke et al., 2012)、功利主義判断を促すことが見出された。これらの知見は、心理的葛藤の低減が、功利主義判断を促進させることを示している。すなわち、ポジティブな感情に誘導された際、道徳的葛藤によって生じるネガティブ感情が減少したため、大勢のために 1 名をあえて犠牲にする功利主義的な反応が増加すると考えられている。

そこで本研究では、個人が義務論・功利主義を重要視する道徳判断の程度と、否定的感情の程度との関連について検討することを目的とした。多く功利主義判断を行う人は、道徳判断に伴う認知的葛藤が小さいため、否定的感情が小さく、また多く義務論判断を行う人は、心理的葛藤が大きいため、否定的感情が大きいと予測した。さらに、ポジティブ感情による道徳判断における心理的葛藤の減少と、功利主義判断を増加に関し検証を行うため、覚醒度と道徳判断との対応関係に着目し、覚醒度の増加に伴い、義務論判断が増加すると仮定した。実験計画は、感情価 (ポジティブ感情群・ネガティブ感情群・中立群) の一要因被験者間計画である。否定的感情の程度を生理的に測定するため、急性ストレスや否定的感情の生理的指標である、唾液アミラーゼの測定を用いた。実験プロセスは、国際感情写真システム (international affect picture system, IAPS: Lang, Bradley, & Cuthbert, 2005) 課題と道徳ジレンマ課題から構成される。IAPS 課題は、特定の感情価の増加を促す大規模なカラー写真のセットを用いた、感情操作のための課題である。IAPS 課題では、ポジティブ感情、ネガティブ感情を中立的な感情を想起させる画像を使用した。それぞれの群において、画像を 30 枚 1 枚 5 秒間提示した後、別の画像を提示し、全 30 枚の画像を提示した。すべての画像を提示した後、感情状態を評価するために、自己査定マネキン (Self-Assessment Manikin; Bradley & Lang, 1994) への回答を求め、感情状態を生理的に測定するために、唾液アミラーゼの採取・測定を行った。さらに、覚醒度について、課題中の脈拍数と瞬目回数から測定するため、脈拍計と眼球運動計測器 tobii を用いた。唾液アミラーゼの測定と自己査定マネキンへの回答は、実験前、IAPS 課題後、道徳ジレンマ課題後の計 3 回行った。

IAPS 課題の後、道徳ジレンマ課題に取り組みさせた。この課題は、Bartels (2008) で使用された道徳ジレンマ課題を用いた。道徳ジレンマ課題は、内容画面、質問画面から構成される。内容画面では、PC ディスプレイに表示された道徳ジレンマ状況の記述内容を提示した。その後、質問画面に移り、内容に対して道徳的に正しいかどうかを“適切”と“不適切”のどちらか 1 つ回答してもらった。すべての課題において、“適切”とする回答は“功利主義判断”を、“不適切”とする回答は“義務論判断”を示している。全課題中に“不適切”と回答した割合を義務論判断の選択比率とし、実験条件間で比較を行った。

実験 1 では、功利主義判断を多くとる人は、道徳判断に伴う認知的葛藤が小さいために、否定的感情が小さくなること、そして義務論判断を多くとるほど、心理的葛藤が大きいため、否定的感情が大きくなると仮定し、唾液アミラーゼをネガティブ感情の指標とし検討を行った。道徳判断傾向を分析するために、義務論判断の選択率の平均値である 40% を基準に、40% 以上の人を義務論判断傾向、40% より下の人を功利主義判断傾向と分類した。実験前・後の唾液アミラーゼを従属変数とし、判断傾向 (功利主義判断傾向・義務論判断傾向) を要因とした被験者内計画の分析を行った結果、唾液アミラーゼの主効果が有意であり ($F(1, 33) = 5.648, p < .05$)、判断傾向と唾液アミラーゼ間に有意な交互作用がみられた ($F(1, 33) = 4.620, p < .05$)。単純主効果の検定では、義務論判断傾向における唾液アミラーゼが有意であった ($F(1, 33) = 4.950, p < .05$)。義務論判断傾向において、実験後の唾液アミラーゼ量の方が、実験後のものよりも有意に大きかった。義務論判断を多くとる人は、功利主義判断を多く取る人よりも、道徳ジレンマ課題後に高く否定的感情を感じるが見出された。

研究成果の概要 つづき

実験 2 では、ポジティブ感情が、道徳判断における心理的葛藤を減少させ、功利主義判断を増加させるのかという理論予測を実験検証することを目的とし、覚醒度が増すにつれ、義務論判断が増加すると仮定し、実験調査を行った。その結果、道徳判断について、歩道橋問題では、ポジティブ条件とネガティブ条件は、中立条件よりも、義務論判断を下すことがわかった。一方、トロッコ問題では、ポジティブ条件とネガティブ条件は、中立条件よりも、功利主義判断を下すことがわかった。反応時間について、歩道橋問題では、ネガティブ条件は、ポジティブ条件とネガティブ条件よりも長いことがわかった。さらに、課題に対する感情価について、歩道橋問題では、ポジティブ条件は、中立条件よりも課題に対してネガティブが低く、ネガティブ条件は中立条件よりもネガティブが高いことがわかった。一方、トロッコ問題では、中立条件、ネガティブ条件、ポジティブ条件の順にネガティブが高かった。課題に対する覚醒度については、歩道橋問題とトロッコ問題の両課題において、中立条件、ネガティブ条件、ポジティブ条件の順で覚醒が高いことがわかった。

歩道橋問題は、トロッコ問題よりも、義務論判断がとられることが見いだされた。また歩道橋問題は、トロッコ問題よりも、道徳判断の反応時間が長く、困難な課題であることを確認した。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 雑誌論文

相馬正史・都築誉史 (2015). 考察方略が道德ジレンマ状況における判断に及ぼす影響 『立教大学心理学研究』, 57.

④ その他

相馬正史・都築誉史・千葉元気 (2014). 多様な考察が道德ジレンマ課題における判断に及ぼす影響 『日本心理学会第 78 回大会発表論文集』, 759.

相馬正史・都築誉史・千葉元気 (2014). 道德ジレンマ場面での道德判断と生理的な否定感情の関係性 『日本認知心理学会第 12 回大会発表論文集』, 56.

Soma, M., Tsuzuki, T., & Chiba, I. (2014). The effect of time pressure and ego depletion on moral judgment in the moral dilemma. *Abstract of the 35th Annual Conference of Society for Judgment and Decision Making*, No.2-107.